

談 話 室

一 般 教 育 と 地 学

森 征 洋

地学を担当するようになってから4年になろうとしていますが、一般教育における地学教育のありかたについて、専門教育とは違ったむつかしさを年毎に感じます。

「地学とは何か」という点については、理科の他の分野と違って説明を要するようには思います。というのは地学という言葉から受ける印象と実際の内容とに差があるからです。おそらく大多数の人にとって、地学という言葉から受ける印象は大地に関する学問ということになるのではないかと思います。実際、地学という言葉は古くは地理学と同じ意味で用いられていたことです。現在では、理科教育の一分野を示す言葉として、それなりの内容を含んで用いられています。

戦後、高等学校および大学の一般教育における理科教育は物理学、化学、生物学、地学の4分野から構成されることになりました。ここでは法則から出発して現象を見ていく色彩の強い物理学、化学以外に自然界そのものの現象から本質を明らかにしていく教育の分野として生物学と地学がとり入れられることになりました。このような理科教育としての地学では大地だけでなく大気、海洋、天体まで含む広範囲の自然現象に関する科学を扱うことになりました。

小中高の生徒や大学生が持つ理科的な興

味や疑問の中には大地、大気、天体などの直接目にふれる自然現象そのものに関するものがかなりあると考えられます。

したがって、理科教育の一つにこのような分野を対象とする地学がとり入れられたことは、地学という名称が適当であるかどうかという点を別にすれば、十分理解できることです。しかしながら、地学が大地から天体までの広範囲の現象をとり扱うことは、地学の教育体系を形成する上で、理科の他の分野とは違った困難さを生ずる原因となっているように見えます。地学以外の物理学、化学、生物学は教育分野を示す言葉であると同時に学問分野を示す言葉でもあるのに対して、地学は理科教育の一分野を示す言葉ではあるが、学問分野を示す言葉ではありません。すなわち、対応する学問分野として「地学」という分野はなく、天文学、地球物理学、地質学、鉱物学等々の複数の学問分野がそれに対応することになります。そのためある学問分野の体系に基づいて教育体系を考えるということが、地学の場合できずに、学問体系とは全く別に地学の教育体系を考えなければならないという特殊性が生じます。

この特殊性のために、地学の教育体系は一貫したものにならず、百科辞典的な知識の羅列という色彩が強くなりがちです。こ

の傾向は地学という分野ができて以来約30年になるのに解消されたとは言いがたく、ある人によれば地学は創設期の“混合物”のまま“化合物”になっていないということですが、まさにこの通りであるように見えます。

地学の教育体系を考える上で、種々雑多な内容をいかに精選し系統化するかという点が最も重要な課題になると考えられます。これは高等学校においても大学においても共通の問題ですが、対処の仕方はそれぞれの段階毎に分けて考える必要があります。高等学校では一人の教員が地学の全分野を教えています、大学では一般教育も専門教育も一人の教員が全分野を教えることは不可能に近く、どの大学でも各教員自身の学問分野に対応する地学の領域を教えているようです。

私は一般教育の地学では地球物理学に関連した分野を教えています、この分野自体、固体地球、海洋、大気等の広い範囲を含んでいます。一般教育の地学を担当することになったとき、これらの全領域を含んだ地球物理学入門的な内容の講義案を準備しました。なるべく数式を用いないように

留意したこと以外はほとんど専門の基礎教育と同じ内容になっていました。次の年度からは地球に対する人間の認識がどのように発展してきたかという歴史的な面も強調するようにしてみました。しかし、地球物理学入門とする志向があったため、内容的にはいろいろな分野の知識のつめこみという傾向になっていたように思います。

ところで、一般教育を考える場合、広く自然に対する見方、考え方を形成する教育のあり方考えることが重要であることを考えれば、地学教育の全領域を系統化することか網羅することを考える必要はないこととなります。ある領域を対象にしてその分野を深めることによって自然に対する見方が深まれば、その目的が達せられたと考えてよいこととなります。

私自身これまで地球物理学の全領域を紹介することに配慮しすぎて、講義が分散的になっていたのではないかと反省しています。次年度からはもう少し分野をしぼって、人間と自然とのかかわりに重点をおいた講義を行ってみようと思っております。

アイスランドでの柔道指導

香川大学教育学部 村田直樹

北歐アイスランドでの二年間の柔道指導を終えて参りました。皆様はアイスランドという国を御存知でしょうか。以下、私が直かに触れたこの国について凡その説明をし、併せて柔道指導に関する報告などして

みたいと思います。

一口に言いますと、アイスランドは柔敵な所でした。何が柔敵だったのか。それは美しい北歐の自然、きれいな家並み、高い生活水準、そしてブルーの瞳を輝かせる美

しいアイスランド娘達等、そんな印象がすぐに浮んで参ります。

この国はイギリスの遙か北方、北極圏に近い北大西洋に位置する島国です。面積は十萬三千平方キロで日本の3分の1弱。人口はわずかに二十一万人と聞きます。島の南西部に首都レイキャヴィクがあります。レイキャヴィクとは「白い煙の入江」という意味だそうで、「白い煙」とは地下から湧き出す温泉の煙を指しているとのこと。火山島で温泉に富んでいる一方、氷河、峡湾が発達。言わば火と水の国とでも申しましょうか。そう言えばこの国の国旗は、火と氷と空を表わしていると聞きました。

気候はと言うと海洋性気候で夏も涼しく、風がいつも吹いています。レイキャヴィクの街は家々がきちんと並び、屋根の色が緑や青、赤とペイントされ、壁の色は真白。目にも鮮やかな調和を見せています。道路は広くゆったりとしていて、その両脇を芝生が横たわり、その中に歩道があります。公園には北国のかれんな花が咲き、緑に囲まれた池には白鳥やカモが群れ交っています。偉人の像やヴィーナスの像が点々と立ち、北欧の情緒やロマンといったものが自然と我々を包みます。

夏季には目の覚める様な緑の風景が冬には一変し、白一色の銀世界となります。アイスランドの子供達は、この国特産のウールのセーターや手袋に身を包み、日本の子供達と同じ様に雪合戦や雪ダルマ作りに興じます。凍った湖では首に巻いた色とりどりのマフラーをなびかせて、夕方暗くなるまでスケートをしてはしゃいでいます。

空気が澄み渡っているせいか、快晴の時は夏では緑の芝生が一層映え、冬では真青な空に純白の雪化粧が光り輝き、形容し難

い姿を見せてくれます。

北部を北極圏に位置する程の北の国ですが、予想に反してそれ程寒くありません。何故かと尋ねてみました処、メキシコ湾流の北進により、アイスランド全体がその暖流に包まれているからだ、という答えが返って来ました。因みにレイキャヴィクの平均気温を調べてみましたら、七月11℃、一月1℃でした。

私の住んで居りましたレイキャヴィクは天候が変わり易く、恰度山岳地方の天気の様で、青空から曇り、曇りから雨、と短時間のうちに目まぐるしく変わります。冬ではそのまま雪になることもめずらしくありません。四季を通じて雨が多く、夏季を除くと朝夕は殆ど毎日雨が降ります。しかし、日本の雨と違い大抵霪雨です。そこに風が吹きますから、細かな雨はいつも横に走っています。

強風の為、この街では婦人でも傘を差しません。私は雨の中を、いくら霪雨とは言え、傘無しで歩くことに慣れていませんし、日本から持っていった折畳傘を使いました。すると強風にあおられてたちまちオチョゴになってしまいました。逆さになってしまった傘を惨めな気持ちで元通りにし、再び風の向きに調子を合わせながら歩き出したら、幾らも行かぬうち、今度は逆方向からの風にあおられ、再びバリバリツツと音をたてて見事なオチョゴ。とてもつき合いきれません。街中でのことで回りの人が笑っていました。傘を差している人は誰も居ないのです。私もそれ以来、傘は止めにししました。

アイスランドの主要産業は何でしょうか。それは牧畜と漁業です。牧畜は羊が主で、この国特産の羊毛による保温効果の高

い極太のセーターは、自然色の美しさも相まってこの国の自慢の一つ。漁業は大陸棚で有名な北海漁場に臨み、スケトウダラ、ニシン、カレイ等の漁獲量を誇り、国の経済の7割以上を支えていると言われてい

ます。海がこの国の経済の基盤であり、先日迄のイギリスとの間に於ける通称「タラ戦争」（アイスランドの漁場区域を従来の五十カイリから、二百カイリに広げるとい

う主張をイギリスが拒否。論議は決裂し、両国間の政治機関の活動停止。海上では漁船同士及びガンボート等による妨害行為が繰り返される始末となった）は日本の新聞でも報道されて、ご記憶されている方もお在りかと思

います。日本の船（貨物船）が鯨とししゃもの時期にアイスランドへ参ります。鯨は捕獲後、捕鯨母船で直ちに加工してしまう方法が現在一般的と聞いていましたが、この国では鯨を陸まで運び、ロープで引き揚げ、青空の下で開いています。

溶岩から成る台地の為か、自国で生産出来る物は極めて少なく、車両、機器類は言う迄もなく、紙や鉛筆に至る迄、生活必需品の殆ど全てを輸入に頼っています。それ故か物価は高く、日本の1倍半から2倍位でしょうか。

地下に在る唯一の豊富な資源は温泉で

す。どの家、どの建物も温泉利用によるセントラルヒーティングが完備し、室内は一年を通じて22℃に保たれています。アイスランドの人々は室内では半袖で暮らし、外出する時はご自慢のウールのセーターか毛皮のコートを着、車に乗ってスマートに行動

します。ながら、トコトコと独り道場に向かって歩く姿はいつも私です。（もっともガールフレンドが出来てからは私も車に乗る人となりましたが、エヘン。これ、蛇足……。）

北欧と言えば「白夜」という言葉を聞いたことがあると思います。日本で言う夏至の頃を頂点に日照時間の長い日が続き、特に六月七月は一晚中明るく、夜の九時頃などはまるで真昼同様。午前二時、三時頃でも外で楽に本が読める位です。そしてそのまま朝が来てしまいます。

滞在二年目の夏、アイスランド柔道連盟の招待でアイスランド北部を1週間程観て回る機会を得ました。その時、北の海辺にとどまって見た太陽の動きは大変興味深いものでした。一日の務めを終え、沈もうとする太陽は真赤な夕陽となり、彼方に横たわる水平線に向かって静かに降りて行きます。水平線上に達した夕陽はそのまま没すると思いきや、沈まず、次にはずーっと横に水平移動。日輪とはよく言ったもので恰もそれは赤い車輪がぐるぐる回って水平線を移動しているかの様に見えました。そして、やがて或る位置まで来るや高度をとり、今度は朝陽となって昇って行くのでした。

もう一つ、日本では見たことのない興味をひかれたものに極光（ノーザンライツ、又はオーロラ）があります。これは晴れた冬の夜空によく見られ、緑色の光を放ちながら帯状になって夜空を走るものです。緑の光は時には赤色に変化し、藍色の夜空を背にゆらゆらと揺れながら移動し、恰度暗い空に掛かった七色のカーテンの様です。その色と形、位置とは時々刻々変化し、時には菜早く時には遅く、ながめていて全く興味が尽きません。か様な所が私の派遣さ

れたアイスランドでした。

昭和五十年三月、講道館柔道の名誉と責任を背負い、「どんな奴が居るのかなァ」と一まつの不安も抱きながら、私はそのアイスランドへ向けて飛び発ちました。

アイスランドに着いた時、こんな事を想いました。「彼等の柔道が、自分の帰る頃にはどの位変わってくれるだろうか……。」しかし、これ、ずい分カッコ好い台詞ですね。だから直ぐ思い直したものです。「何言うか。短期間でそうそう変わるものではない。焦らず地道にやっつけていってよ。」

結局、この気持ちで二年間をやって来た様に思います。

最初に見たアイスランドの柔道は、基本動作が不十分なものでした。まずその点を気付かせ、基本動作修得の意義や重要性を説き、彼等を指導していこうというのが最初の仕事でした。

が、それよりも先にする事がありました。それは青い眼の連中をまず完膚なきまでに投げ、抑え、絞め落とすこと。これは日本を発つ前から諸先輩に十分言われていたことでした。初めて見るアイスランド人は背が高く、肩幅もあり足腰もしっかりとして、見るからに強そうであり、「こいつ等をやっつけるのか」と思い道場に立った時は、さすがに、遙々遠い日本から単身やって来た孤独を感じ、孤立無援の何とも言えぬ緊張感を覚えたものでした。眉つり上げて挑んで来る大きな選手達を投げ、倒し、私の柔道は十分に通用してくれ、万々才。その後の指導を成る意味でかなり楽なものにしてくれました。

さて、たくさんの技を習うのも結構ですが、私はまず一つの技を身につけるべく努力せよ、と彼等に教えました。一つの技を

来る日も来る日も反復練習させました。これは選手諸君にとり、面白くなかったかも知れませんが。

けれどもその反復練習の過程で、柔道技術修得に必要な体捌きや両手の使い方、頭持ち等が整ってき、私は「これでよいのだ、正解正解！」と悦んだものでした。

一年目を過ぎる頃、選手各自にも徐々にそれが分かってき始め、何が重要なのかを、実際、練習や試合を通して理解する様になってきました。これこそ開眼と言うべきでありましょうか。以後の指導や意見の交換等は実にスムーズにいく様になりました。

と、現場の方はまずまずの歩み具合だった様に思います。

注意して取り組まねばならなかったことは、アイスランドに於ける柔道界の複雑な情勢に対してでありました。

一九五七年、この国初の柔道クラブ設立。ところがしばらくして後、幹部内で対立が生じ、遂に決裂。クラブを後にした幹部は別の新しい柔道クラブをつくりました。この新クラブは選手を引き抜き、強かった選手は殆どそちらへ連れて行かれてしまったのです。

私が派遣される数年前に、アイスランド柔道連盟が組織されましたが、連盟内部は新クラブからのメンバーが主流を占め、連盟会長もそちらから選出されました。

私が招じられたのは二十年の歴史を誇る最初の方のクラブでした。経験者の殆どが別の柔道クラブへ行ってしまった後故に、そこには若い、初心者ばかりが居りました。このクラブは、そういった若い選手達の強化を私にたくしたのです。自分のクラブの為に、自分達のクラブの為に、と、それのみ願って日本に指導者を依頼したの

です。この気持ちは十分にわかります。私はこのクラブ強化の為に精を出し始めました。このクラブの選手達を強化し、レベルを上げることが即ちアイスランド柔道のレベルアップになるのだと思い汗を流しました。

けれども私の視点は、一クラブのみの事に没頭するのではなく、柔道人口もさして多くないこの国ですし、アイスランド柔道界総ての為に、出来る限り協力を惜しまぬ方針でいこうという所にいつも置かれていました。恩師の先生方からよく言われていた「大きく自然体に構え、小を捨て大をとる。の教えが、どこかで私を動かしてくれていたのかも知れません。

アイスランド柔道界を考える時には、どうしても柔道連盟が出て参ります。しかし、自分の居るクラブとそことは仲違いのムード。さァ、こうなると情勢を鑑みつつ、慎重に行動する必要があるぞ、と思いました。

ではどうするか。

答えは意外にも簡単に得られました。相手が連盟でもクラブでも、詰まる処人間関係であり、それには誠心誠意を以てつき合うことであるという結論です。

ただ注意することは言葉の障害です。異国に在って、これは実に誤解を生じ易い。誤解など一番つまりません。私はその点をよく注意し、耳をそばだて、相手がわかる迄言ひもし、自分の考えていること等も述べたりして進んで行きました。

試合のある毎に連盟会長始め役員諸氏と親しく話したり、意見を交換することを忘れず、又、例え相手クラブの選手でも、好技は賞め、欠点は歯に衣着せず指摘しました。そうしているうちに気心も知れ、いつ

の間にか仲好くなっていってしまいました。

私のクラブと連盟とで話し合いが繰り返される様になったのもその頃です。私はナショナルコーチに任命されることになりました。

始めは Judodeild Armanns というクラブから招じられた立場でしたが、その時点から連盟のコーチともなりました。恰度、二股を掛けた形となった訳です。しかし、以後、そのことでの問題は別段生じませんでした。

私はこの辺からはもう、伸び伸びやるだけで、選手共々大いに練習を続けました。

その甲斐あってか、北欧選手権で初優勝（一九七六年、個人軽重量級）、その余勢をかってモントリオール五輪大会へ、アイスランド柔道チーム初参加等、忘れられない思い出を持つことが出来ました。

教え子達から今も、私の手元へ手紙が届いています。現地の新聞切抜きと共に、ことしの北欧選手権にて再度、アイスランドから優勝者を出したと、伝えてきました。それは二階級であり、うち一人は前年度、私と一緒にスウェーデンへ行き、アイスランドに初優勝をもたらした選手でした。二連勝とは立派なものです。

人口わずかに二十一万人の小さな島国ですが、地球の北の方で、北欧諸国を相手に一生懸命気を吐いている様子が、私にはよくわかります。一人一人の汗にまみれた選手諸君の顔が鮮明によみがえって参ります。純朴で、一途な性格の選手達でした。又、少年部、女子部等にも将来を見守ってやりたい様な好い素材がそこに見られました。

彼の地での講道館柔道の正しい普及発展を心から祈るものです。